■■■　2011年度総会報告 ■■■

さる6月11日(土)に18時から、2011年度総会を行いました。

まず、2010年度の事業報告、決算報告、監査報告、その後、2011年度役員案、2011年度の事業計画、予算計画について、事務局より報告しました。

昨年度の実績としては、居宅・訪問介護支援事業は利用者数・収支改善の必要がありますが、その他の事業については利用者・収支状況とも安定した１年となりました。　日本語プロジェクトでは、21カ国にわたる学習者が延べ605名、支援者数延べ372名、マンツーマンレッスン702回、グループレッスン302回、日曜日地域日本語教室を45回実施しました。

外国にルーツを持つ子どもの学習支援事業には、ベトナム、フィリピン、中国、ペルー、ウクライナにルーツを持つ41名、年間延べ2155名が学習、延べ1441名の支援者に活動して頂きました。また家庭環境の把握のための家庭訪問の実施、学校との連携ため学校訪問を行いました。

デイサービスセンターハナの会は、６月より土曜開設を実施しました。年度末の登録者数41名、月利用者数364名と安定した運営を実現することができました。

居宅介護支援事業では要介護者延べ172名、要支援者74名のケアプランを作成しました。

また神戸市介護保険課との協働事業であるコミュニケーションサポーター派遣は、４件実施しました。

訪問介護事業では、1593.5時間の派遣を実施しました。

その他には、８回目となる兵庫県国際交流協会などとの共催事業「『多文化共生』を考える研修会」、神戸大学国際文化学研究科異文化研究センターと連携して「長田研究会」を実施しました。

・2011年度の事業計画・予算については、居宅・訪問介護支援事業、子ども事業の財政に課題があるものの、継続できる体制・財政基盤づくりを進めていくことを報告しました。

また、阪神淡路大震災時に多くの人の支えで生まれた団体として、東日本大震災の支援をはじめることの報告がありました。KFCの趣旨である定住外国人という少数者に限らず、長年続けてきた「移住者(移民)」の新たな地での生活支援に繋がるものであると考えて活動しています。

マイノリティや子どもといった単なる多数決では人権が保障されない弱者への視点を持った、市民社会づくりを進めることの大切さを、一人でも多くの人たちと分かち合えるよう、今年度も活動を進めていきます。

◆中国残留日本人孤児の歴史、現状課題を聞いて

講演は６月11日(土)15:30～17:00まで、アスタ４番館で開かれました。講師は、神戸大学教授で、秋田への出稼ぎ、縫製業の女工、炭鉱労働者等の人の移動を研究されている浅野先生でした。先生は2004年から、残留孤児の調査を始められました。残留孤児といいますのは、日本の敗戦、当時、13歳以下だった人を指すもので、先生は兵庫県在住の残留孤児だった人達からの聞き取り調査を参考に演題の問題に取り組まれていられるのです。

先生のお話しを要約しますと1936年満州農業移民計画という名で日本政府国策の一つとして黒竜江付近に多数の日本人が送られ、残留孤児たちは大陸の広野で希望を抱く家族の子女としてここで生まれ育ちました。ところが1945年、日本は敗戦、ソ連の満州対日参戦があり、当時、男性は兵役、動員に取られ、残っていたのは老人、女性そしてこの度の残留孤児となった幼い子どもたちでした。この時から彼らの逃避行、苦労がはじまったのです。長い道のりの間の病死、餓死、

自殺、殺害さえも。その悲惨な話でテレビ化された山崎豊子の「二つの祖国」を思い出しました。これらの孤児の中、あるものは中国人に拾われ、あるものは親から託され、中国人の子になりました。恵まれた愛情と教育を受けた子もいましたが、大半は労動力として育てられ、働き続けました。彼らの年齢では理解できなかったのですが、日本人であることを隠せと命じられ、1966年の文化大革命の時には日本人故の怖さも味わったことを付け加えられました。

また、日中国交回復の後の肉親捜しについて孤児たちは年を取っていくので遅すぎたと、また受け入れ態勢も不十分だと強く非難されていました。日本政府の政策の犠牲になった彼らへの償いとしてとり組めとの言葉もありました。続いて祖国日本へ戻ってきた残留孤児たちの現状は、就職、住居、言葉の壁、年金、身元保証人のことなど、問題が山積していると具体例も話されました。

私たちは彼らの前にある多くの問題に対して、何ができるのだろうか。今、たずさわっている日本語支援で協力しているといえるのではないかと励ましを頂いた気がしました。

質疑応答では、二つの祖国を持つ彼らの生き方を巡っての人間論、地震等で処理しなくてはならない問題があまりにも多くある現在、先生の残留孤児への償いへのトーンの強さに首をかしげる率直な意見も出て、予定時間を30分近くオーバーした講演でした。　　（ニュース係　気賀 倭文子）

■■■ＫＦＣ日本語プロジェクト■■■

◆日本語ボランティアとポートフォリオ

7月9日のKFC研修会は、「日本語学習支援者とポートフォリオ」という題目で小林浩明先生の講演でした。小林浩明先生は、北九州市立大学国際教育交流センターで外国人留学生に日本語支援されています。

ポートフォリオっていったい何なのかよく分からない筆者が広辞苑を引くと、「紙ばさみ・折鞄の意」と書いてありました。転じて「自分を表現するための資料一切合切」をポートフォリオと呼ぶことがあるようです。ともあれ講演の概要を以下の通り報告いたします。

外国語ポートフォリオは、日本より早く移民を受け入れたヨーロッパで開発された画期的な外国語学習支援方法です。

一般の教室が先生の主導で学習が進められるのとは異なり、外国語ポートフォリオは学習者が自己主導して学習を進め、支援者(ボランティア)がそれを支援するのが基本的な考えです。

「意識する→計画する→実行する→振り返る」のサイクルを繰り返します。

支援の進め方は、学習者一人一人に対応した「対話型」が基本です。

支援者は「日本語教師」の資格保有者である必要はありません。

小林先生は、お立場を活用してボランティア支援者として大学生を募り、「日本語ポートフォリオ」を軸にした地域日本語教室を立ち上げました。そして先生は、この日本語ポートフォリオに手を加え、「日本語学習支援者のためのポートフォリオ」を作りあげました。その内容は、

① 支援者としての自己分析
② 目標到達マップ
③ 短期学習目標･内容確認表
④ 問題分析シート
⑤ 学習記録表
⑥ 学習のスケジュール

以上です。これら6つの資料は講演のレジュメに添付して配布されました。ボランティア支援者が事前に上記「①支援者としての自己分析」を記入しておき、外国人学習者を支援するときに自己

紹介を兼ねてその内容を伝えれば学習の場が大いに盛り上がることでしょう。
講演会後半は全参加者約20人が5つのグループに分かれ、各グループごとに各人の「①支援者としての自己分析」を互いに紹介しあい親睦を深めました。
この講演には福岡教育大学大学院教育学研究科M1の下野純一さんのサポートがありました。小林先生、下野先生、役に立つ講演をありがとうございました。
（ニュース係　操田 誠）

◆ＫＦＣ研修会「とよた日本語学習支援システム」～新しい地域の日本語教室の形～

６月２５日に、ＫＦＣ研修会「とよた日本語学習支援システム」が行われました。名古屋大学とよた日本語学習支援システムコーディネーターの北村祐人氏が講師で、日本語教育に携わっている方やこれから始めようとしている方々３３名が参加し、午前１０時から夕方の５時までの７時間の研修でした。
この「とよた日本語学習支援システム」は、外国人が市の人口の３．５％（約１４，８００人）を占める豊田市が多文化共生社会の実現を目指し、平成２０年から、市内に在住、在勤の外国人の方に地域社会で日常生活を営むために最低限必要な日本語能力を修得できる仕組みの構築と普及を目指したもので、名古屋大学と共同で推進されています。
　まず、日本語によるコミュニケーション能力の把握を目的とした独自のテストでその人の下記のようなレベル判定を行います。このレベル０と１の人を対象に、このシステムを使い支援を行い、レベル２まで持って行くことを目的としています。
<とよた日本語能力レベル>
レベル６／熟達段階：より抽象的な議論が日本語を用いてできる
レベル５／深化段階：効果的なコミュニケーションが日本語を用いてできる
レベル４／拡大段階：より多くの領域で日本語を用いてコミュニケーションができる
レベル３／自立段階：自立して最低限度の社会参加が日本語を用いてできる
レベル２／要支援段階：周囲の支援に基づいて基礎的な社会参加が日本語で行える
レベル１／基礎段階：限られた単語を理解したり、話す・書くことができる
レベル０／未学習段階：日本語が話したり聞いたりすることがほとんどできない
レベル２の周囲の支援とは、わかりやすい日本語の話し方、表現を使えばという意味です。
このシステムでは、専門講師のプログラム・コーディネーターと日本語パートナー（ボランティア）と学習者が参加します。会話クラスでは、必ず事前に次回テーマが出され、それに関して学習者は日本語で話したいこと、伝えたいと思うことを考えてメモしてきます。教室では、まず、コーディネーターによるモデル提示があり、次に、日本語パートナーの指導で、学習者がメモの内容を写真や絵などを使って話す内容を考え、それをできるだけ相手を変えて伝える。次のステップで、コーディネーターの指導で、学習者が最初話した内容を少し発展させて、上記の作業を２～３回繰り返し、最後に、皆の前でその日に話したことを報告する。という流れになります。
　テーマは、意味ある場面の中での具体的な課題にする必要があり、今回は、“初対面の相手に簡単な自己紹介をする”というテーマでシートを作成し、相手を変えながら説明するという練習を行いました。併せて、コミュニケーション７つ道具（写真、現物、絵、地図、辞書・本、人、ジェスチャー）の使い方、パートナーの説明の仕方等も教わりました。
　興味ある方は、http://www.toyota-j.com
を参照下さい。

（ニュース係　川渕 啓司）

■■■ＫＦＣ外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆共に山を登る

私は、ほんの数ヶ月前、Ａ君という一人の受験生との登山を終えたばかりである。無事下山した私は、次の山を登り始めている彼に思いを馳せながら、美化されつつある登山の思い出を綴ろうと思う。もちろん、本当に山を登ったのではない。ＫＦＣで彼と過ごした日々は、まるで登山のプロセスのような、そんな日々であった。

Ａ君と出会ったのは、まだまだ暑さが残る秋のある日であった。受験生、イケメン、真面目。Ａ君はそんな少年だ。互いに挨拶を交わしたあと、学習支援が始まった。ふたを開けてみて、驚いた。受験前だと言うのに、おおよそ受験に立ち向かえるような術を持ち合わせていなかったのである。事態の深刻さに気付いた私は、それまで築き上げてきた「楽しいボランティア」像を壊さざるを得なくなっていた。この瞬間から、私は彼と山に入ることになったのだった。

それからというもの、彼は高校進学のための「詰め込み」をコツコツとこなしていく日々が続いた。もちろん、サボったり投げ出したりすることも多々あった。私も、何回「もう無理や」と思ったことかわからない。「先生、がんばったら高校って受かるもんなん？」と質問された時、何も答えることができなかった「どうしようもなさ」は、今でも忘れることができない。受験本番が近付くほど、私はプレッシャーに押しつぶされそうになった。もっとも、Ａ君は、我々には想像もできないようなプレッシャーを感じながら、必死にスパートをかけていたに違いない。山頂は、もうすぐそこである。

　Ａ君は、みごとに希望の高校に合格した。様々なハンデを負いながら、あきらめずに最後まで努力したことが実を結んだのだ。神様のおかげでもなく、「キセキ」でもない。自分が登ると決めた山を、しっかりと自らの足で登った結果である。控えめに喜ぶ彼の顔は、達成感に満ち溢れていたように見えた。

　学習支援者として彼と共に山頂まで登ったことは、私にとっても大きな経験となった。頂上で見た景色は、最高だった。彼とともに同じく山を登っていた支援者さんたちも、同じような喜びを感じていたのではないだろうか。

　共に山を登ること。共に汗を流し、喜怒哀楽を共にすること。それは、「寄り添う」といったきれいな言葉では表せない「しんどい」プロセスである。私にとっての学習支援とは、まさに登山であり、現在も様々な子どもたちと山登りに挑戦している。今でも、途中であきらめたくなることも多々あるが、A君の顔を思い出すたびに、「もうちょっと頑張ろう」と思う。

Ａ君は今、高校生活を送っている。彼も私も、新しい山を登り始めている。出会いあれば別れあり。少し寂しいが、今の私の中には、彼との思い出がいつまでも深く刻まれ続けることであろう。また、どこかの山で出会えることを楽しみにしながら、この経験を生かして子どもたちと関わりつづけたい。　（芝野 淳一）

■■■KFC中国帰国者支援事業■■■

◆新長田帰国者交流会と私

　４月から始まった新長田帰国者交流会は暑い中も毎回30名近い参加者が来られ、スタッフ5～10人で応対しています。この帰国者交流会は、Ⅰ部：交流会、Ⅱ部：太極拳、という構成で進行しているのですが、今日はⅠ部の交流会について簡単な紹介と私個人の感想を書かせていただき

ます。
交流会のおよそ半分を占めるＩ部では、歌や簡単な日本語学習を通じて参加者同士、また参加者とスタッフの交流を図っています。残念ながら私は中国語がわかりませんので、表情や視線を伺いつつ、時には通訳を交えながら会がすすんでいきます。
最初は「太極拳の先生が言う指示や説明がわかるようになる」という目標で、「上・下・右・左」といった位置の言葉から始め、「頭」「ひざ」など体の一部の名称、そして「手を前に」「上げて」「下ろして」のような指示言葉を学習しました。あまり堅苦しくならないようにと毎回頭を悩ませながらも楽しく企画しています。
前回（6月28日）は七夕前ということで、５つのグループにわけ中日の七夕の相違点や特徴について話し合いました。グループによって内容は様々だったようですが、中国の七夕文化についても教えてもらうことが多く、スタッフもいい勉強になりました。また短冊に願い事を書いたり、と和気藹々と楽しく交流できたのではないかと思っています。
私は、太極拳はもちろん、日本語学習のお手伝いもまだまだ初心者なので、参加者の声やスタッフ内の意見交換もとても勉強になります。毎回終わる度に、反省と新しい気づきの繰り返しで頭が活性化されていく気分です。これからも笑顔と元気いっぱいでがんばりますので、よろしくお願いします。
　(ボランティアスタッフ　藤井 妙子)

■■■ ハナの会■■■

◆須磨海浜公園へ遠足に行きました。
5月17日(火)、18日(水)の二日間、須磨海浜公園に遠足に出かけました。利用者様はいつものように来所され、軽く体操をしてゆっくり支度をしてから３台の車に分かれて乗り込み、11時頃にハナの会を出発しました。お天気も良く、涼しい風が吹く絶好の遠足日和となりました。
先発隊スタッフが松林にブルーシートと座布団を敷き、バーベキューセットを準備して後発隊を待ちました。11時半過ぎには全員が到着。ゆっくりとシート、ベンチ、パイプ椅子などに座って頂きちょっと一息。記念撮影をした後は、理事長始め男性スタッフと厨房のお姉さん達は焼き肉の準備、他スタッフはお弁当（デイで作ったおにぎり、煮物、キムチ）とサンチュ、エゴマの葉、サムジャン（味噌）などを準備して利用者様に配り、準備OK！ 焼きあがったお肉を順々にお弁当の横に入れていきました。
「ゆっくり召し上がって下さい。」「お肉はたくさんありますからね。」「サンチュもまだありますよ。」
みなさん、本当に美味しそうに焼き肉を頬張り、満足そうにされていました。「やっぱり焼き肉は美味しいわ～。」
食後はゆっくりとおしゃべりを楽しんで、いつもの歌の時間となりました。チャングの伴奏の中で、思い思いの歌をみなさんで歌い、数人の方が踊られました。美味しいコーヒーとおやつで一服。歌や踊りを楽しまれる方の他、ごろりと寝そべって楽しそうにおしゃべりに花を咲かせる方もいらっしゃいました。
年々足腰が弱くなった利用者様には全員での外出が難しくなって来ましたが、暖かい気候の中での今回の遠足は大変心地よく、良い思い出となったと思います。　(スタッフ　朱 良 枝)

■■■ 今後の予定■■■
■■研修会

9月10日（土）13:30～15:30
「年齢の高い人への日本語支援」
根津京子（神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会）
於　アスタくにづか４番館３Ｆ

■日本語ボランティア講座（初心者コース）

9月3日（土）～2011年10月22日（土）　10:00～12:30　全8回

■8月KFC特別講座

8月27日（土）　10:00～15:00
「新しいタイプの日本語教室のあり方の提案」
太田　祥一（群馬県生活文化部国際課課長補佐）
「タスク積上げ型日本語教育の理論と実践」
ヤン ジョンヨン（群馬県立女子大学　日本語教師）　森　沙耶佳（群馬県立女子大学　日本語教師）
於　新長田勤労市民センター　会議室（２）

■「多文化共生」を考える研修会2011

●８月１９日(金)【外国人を取り巻く困難な状況】

13:40～15:10
「マイノリティの貧困状況～改善の必要性～」
堤未果（ジャーナリスト）
15:30～16:45
「東日本大震災の外国人被災者の現状」
後藤 キャサリン（HAWAK KAMAY FUKUSHIMA会長、
福島県国際交流協会タガログ語通訳員）

●８月２２日(月)【外国にルーツを持つ子どもへの教育】

13:30～15:00
「イギリスの多文化教育が日本の教育に示唆するもの」
田渕 五十生（福山市立大学教授）
15:15～16:45
「外国人の子どものエンパワーメント～すたんどばいみーの子どもたちとの関わりから」
清水 睦美（東京理科大学准教授）

●８月２６日(金)【生活者としての外国人の日本語支援】

13:30～15:00　「生活者としての外国人の日本語支援～外国人定着支援日本語システム」
太田 祥一（群馬県生活文化部国際課課長補佐）
15:15～16:45　「多文化共生と日本語教育～日本語教育にできることとできないこと～」
伊藤 健人（群馬県立女子大学准教授）

●８月２９日(月)【外国人県民の活力を活かした地域経済の活性化】

13:30～15:00
「外国人人材との協働：兵庫県だからできること」
井口 泰（関西学院大学教授）

15:15～16:45　「在日コリアン企業の歴史と現状～地場のケミカル産業の変遷を通じて～」
金 泰 煥（大久ラバー株式会社専務取締役）